すか。」

「辯護士も非常に困つてゐる事が二つあるのです。其の一つは鳴野君の家宅を捜査（さうさ）した結果、田宮君がダイナマイトの製法を説明した手紙を送つてあつた事です。夫れから今一つは田宮さんの始終（しじう）取引をなすつた薬種店から爆發物（ばくはつぶつ）の材料を、田宮さんのお名前で買つてあるのです。だから辯護士も言ふのです。鳴野君の申立は徹頭徹尾（てつとうてつび）一貫してゐるから、彼の放火犯人では悪い、しかし田宮さん決して

二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

から爆発の事を教へて貰つた事実があり、薬局から其の薬を田平さんに内證（ないしよう）で買つた形（けい）跡（せき）があるとするなら、他に有力な反證が上（あが）らない限り如何ともする事が出来ないと斯う言ふのです。」

「先（ま）ア、そんな事を宅は鳴弥（なるや）さんに教へたのでせうか。」貞子は疑ぶやうな眼付（めつき）で音無の顔をヂロリと見た。

「僕は其の事実が何（ど）うか斯うか知りません。しかし現に其の證據が押収（おうしう）せられて居るな

ら何ともする事は出来ないです。そこで~~私~~僕は奥さんに申したい事があるのです。」

音無は何か大事件でも話し出すやうに坐様（みずまい）を直した。

「どんな事でございますの？」と貞子（ていこ）も眼を睜った。

「夫りやア奥様は諦（あきら）め言葉だと仰しやるかも知りませんが、私は断ると云ふ事を申上げたいのです」回来さんは仮令（よし）[illegible]の時家（いつで）出を思ひ止りなすつた所で、矢張り今度の鳴野さん達の懸疑（けんぎ）

◆二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

事件で大變な御迷惑をお掛けになるのです。夫れは何（ど）うしたッて逃（のが）れない事です。だから家出をなすッて彼（あ）アいう運命に陥（おち）りなすッたのも、家に居なすッて、死んでもない嫌疑で彼（かれ）是（これ）言はれるのも結局は同じ事です、大変残酷（ざんこく）で無法な話だとお考へなさるかも知れませんが、私は寧（むし）ろ旦那さんが、あゝした自分の息子通りの行動の結果不慮（ふりょ）の死を招きなすった方が、[illegible]を執られたお宅に居られて、下らない殺人事件といふやうな事で繼母の憂目（うきめ）を

ガラス使用

見られるより、ずつと御満足だつたらうと思はれます。これは決して通（とほ）り一遍（いつぺん）の諦（あきら）め訳ではありません。奥様、私自身では田舎君のこくなられた事に對して斯んなに考へてゐるのです。夫れから……』と言ひさして貞子（ていこ）の顔を見~~まし~~たが、貞子の眼には涙が一杯~~[illegible]~~浮んで居た。音無は少し顫（ふる）へを帯びた声で、

『あんまり苛（ひど）い言葉だと仰しやるかも知れませんが、奥様は田舎~~様~~君の亡くなられた事に對して然う諦（あきら）めて貰ひ度い。夫れから御[illegible]

あの庄平（じやうへい）＝田桑の実兄＝さんの事をお考へ下さい、細の方は可愛い幼子（をさなご）を三人まで残して夫婦一時に死なれたので地震（ぢしん）の席に死んだかやありませんか、哲子（てつこ）さんもお太郎さんも始めん父親に亡くなられたのは不便（ふべん）です、夫れは同情致しますが、細の庄平さん夫婦の遺児（みなし）であるエノクさんやピリポさんに比較（ひかく）して見ると哲子さんもお太郎さんも母親だけ残つてゐるだやありませんか。あなたといふので、奥様、僕に今一歩（いまいつぽ）進んで言はして下さい。いよ〳〵

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

田子君の亡（な）くなつた事が斯う決定した以上、遒じ起る問題は貴女方（あなたがた）残る三人の問題です。

田子君は僕に斯う申しました。親類中は皆（みん）な一風（いつぷう）變つた人達ばかりなので、「なアに帰りやア自分勝手（かつて）に外國へ行つたのぢやないか」と云つて後の事は誰も手出しをしないかも知れないが、夫れは決して怨むべき事ではない。人には各々（めいめい）に擔（にな）つて行かねばならない運命があるんだから……と申されました。で、奥様、思ひ切つて言はして下さい。此の後始末（あとしまつ）

◆號二〇（神樂坂下山田製）

を親戚中が相談（さうだん）の結果、哲子さんは誰の所で丈太郎さんは誰の所でと云ふやうに、二人（ふたり）を一人（ひとり）〱親戚に引受けて育てる事になつた結果、貴女（あなた）の姓（せい）が田邊で無くなり、元の生駒（いこま）の姓を名乗らなければならなくなつた所で……其様（えん）な事はあらう筈はありませんが……仮令（よし）然うなつた所で、あなたは二人の生（おい）立（た）ちを陰（かげ）ながらでも見て居る事が出来ます。哲子さんも丈太郎さんも、産みの母が生きてゐるのだと云ふ希望を持つ事が出来ます。エノ

ガラス使用

クさんやピリポさんは甚兵ん許で本當に可哀（かあい）想（さう）です。しかし彼様（あんな）に幸福に成長して行くぢやありませんか。物は取り様（やう）です、両親が夫婦共一時に煉瓦（れんぐわ）に打たれて死んだ庄平（しやうへい）さん達の事を考へてお諦（あきら）めなさるより外はありません。僕私の申上げた事がお氣に障（さは）りましたら御免下さいまし、しかし僕は然（さ）う思ふので、そんなら極端すぎての覚悟を有（も）たれる必要が確（たし）かにあると信じますから、思ひ切つて斯う申上げたのです。

山

[illegible]二〇（[illegible]下山田製）

音無は言黙って吻（ふつ）と太息（といき）を吐（つ）いた。貞子は左の指先で鬢（びん）のほつれ毛を弄（いぢ）りながら俯向（うつむ）いて居たが、涙は引切（ひつき）りなく曇（うる）んだ窶（やつ）れた両（りやう）の頬（ほ）を傳って流れた。

二行アキ

　一月の廿四日に田舎の遺骨（ゐこつ）は小い四角な箱に収（をさ）められたまゝ送り届けられた。

嘸（さぞ）、打湿（うちしめ）った湯の中に親戚一同が悲嘆（ひたん）に暮れて居るだらうと思ひながら音無は二時頃に田舎家に行って見ると、どうしたものか、寥騒動（さうどう）

二〇（神楽坂下山田製）

でもあつた後のやうに、一家の中には沈滞に喧騒な空氣が漂（たゞよ）つてゐた。

『そんな馬鹿な事があるものか、我々が折（せつ）角（かく）船まで迎へに行つて迎つて來た遺骨を、屋根の上にでも天井にでも放（ほ）り上げて置けとは何事だ！』色の浅黒い顔の長い男は火鉢の縁を煙管の雁首（かんくび）で毆（なぐ）り乍ら言つた。

『夫れは君が意味を取違つたのだ、兄貴（あにき）は其様な意味で言つたのぢやア無いよ。』と言れたら縁側（えんがは）の所から出て來たのは東京[illegible]の

弟ピリポであつた。

「しかし然（さ）う言つた筈ぢやないか、現に……」

と憤怒（ふんぬ）に燃えた眼でピリポを睨（にら）み乍ら言つたのは田平の甥（をい）で、ピリポの従兄（いとこ）に當る環（たまき）といふ男であつた。

「言つた、確かに兄貴（あにき）は言つた。しかし兄貴の考へでは遺骨（ゐこつ）といふものは必ずしも棺（くわん）に入れて墓へ葬らねばならないといふ規則も何（えんりやう）も無いのだから、屋根の上に置かうと天井に置かうと差支へないと言つたのだ。つまり其（え）

千鳥二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

様な形式から自由にならねばならないと言つたのサ。」

「では葬式をしないでも宜いと言ふのかい、さう言へば……」

側から一人の男が舌嗚をした。ピリポはすし笑た顔で、

「さうだよ、葬式と云ふやうな事は、しても宜し、しなくても宜いんだ。叔父さんが現に此家で死んで居るのなら、其の屍体を焼くなり埋めなりして何とか處分を夫りやアせねばな

二〇（[illegible]山田製）

らないが、斯（こ）んな一握りの灰（はい）になつて帰つて来た江上、此の灰は此屋床（とこ）の間（ま）に置いても宜い、箪笥（たんす）の中へ収（しま）つて置いても差支へないんだ。だから兄貴は君達のやうに葬式々々つて騒ぐのに反對するんだらうの？」

「そんな乱暴な、全（まる）で破壊（はくわい）な事を云ふ……」

と環（たまき）は（腹立たしさうな）憤怒に燃えた眼でピリポを睨んだ。

「何だい、マダ愚圖（ぐづ）々々言つてるんか。」と大声で言ひ乍ら入つて来たのは東家のエノクであつた。

二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

「どうしても環（たまき）さんは棺箱と輿（こし）とを拵（こしら）つて夫れを担（かつ）いで行列を組まうと云ふんだ。」ピリポはエノクの方を眺めながら言つた。

「輿（こし）を？　そんな形式的な事は廃（よ）せよ。」

「だつて最（も）う大工が来て居るんだぜ、兄（にい）さん。」

「最う拵（こしら）へんかゝつて居るのか」と言つた。エノクは鉋（かんな）の音する裏の方へ走つて行つた。夫れと見え環（たまき）も後（あと）を追つた。

最前から口々の議論を黙つて聞いて居た、

ガラス使用

中野といふ亭子の娚聲は、事容易ならぬかと見て取つたか、周章（あわ）て、裏の方へ駈けて行つた。音無は硝子越しに裏口の方を見て居たが、何れか大声で二言三言争ふやうな聲が聞えたきり、ピタと人の声も鉋（かんな）の音も聞えなくなつた。そして中野とエノクと環（たまき）とは黙つて坐敷へ戻つて来た。

「私は双方に理解（りかい）があります」と中野はエノクと環との顔を見較（みくら）べながら、「エノクさんは畢竟（つまり）亡（な）くなられた田原さんの意志を尊重

911

しようと仰しやるのです。改行 田原さんは私共に
も度々然（さ）う仰しやいました。自分が死んだら
葬式として呉れるなつて。あの晩雅（ばんが）楼（ら）
でなくなつた大地（たいが）の利雄さんを大変褒（ほ）めて
居られたのでした。だから全然葬式を廢（よ）さう
と仰しやる エノリさんの本心は私に能く理解
出来ます。しかし環（たまき）さんの仰しやる事も道理
です。亡くなられた叔父さんの遺骨（いこつ）を成るた
け鄭重（ていちやう）にそして立派な葬式になさらーと仰し
やるのは、夫れも尤も至極なお考へで了つで

ガラス使用

、私に其中間の説を立てさせて下さい。エノリさんの仰しやる通り、棺箱だとか輿だとかいふ事は廢して、そして明早朝葬式だけを鄭重に致しませう。私、さうして両方の説を折衷致しませう」

中間が双方を折り調和した時、エノクは直ぐ、「夫れは然うしても宜いでせう」と言つた。環も遂に其の折衷説に賛助した。

二行アキ

[illegible]二〇（[illegible]山田製）

ガラス使用

葬式の相談だけにでも紛れだけの争論があるとするなら、此後継の一家の後始末（あとしまつ）に就いては何（ど）んなに論が起るかも知れないと思ひながら田舎家を出た青年は翌朝疾（はや）く其の葬式へ立会った。

一家親族の主（おも）立（だ）った人々が二十人ばかり~~…~~、最（も）う座敷に圓（ゑん）座（ざ）を作ってゐた。東京に居るのだといふ田舎の唯一人の~~無~~[illegible]姉である美知代（みちよ）といふのも来て居た。昨日（きのふ）は口角（こうかく）沫（あわ）を飛ばして喧嘩したエノクも環（たまき）も今朝は最（も）う仲の善い従兄弟（いとこ）同志として、稚（いろ）ん

ガラス使用

な事に斡旋（あつせん）して居た。

三人兄弟が二人まで變死して、唯一人生残つて居る盛久（もりひさ）と云ふ田舎の兄が、死生観といふやうな事を簡單に語つた。其の話の要点は「木（こ）の葉（は）が一枚散るのも、虫が一疋死ぬのも、人子が一人死ぬのも皆な夫れは神の定めた法則に遵（したが）ふのだから、其の死様（しにざま）がどうであらうが斯うであらうが決して悲しんではならないと云ふのであつた。

音無も簡單な弔文（ちやうぶん）を讀んだ。そして環ヒエ

ノリとピリポとは途中代り／＼に遺骨を納めた小い箱を提（さ）げて南谷といふ墓地まで行つた。

一行が小山の麓まで行つた時に、右手の茅原（かやはら）がボリ／＼と動いたと思ふと、其所（そこ）から大きな一疋の犬が飛び出して来て、突如（いきなり）貞子（ていこ）に跳（と）で縋（すが）りながらワン／＼と頻りん吠えた。

『先（ま）アブラウ？』と貞子は顔色を変じて裾（すそ）模様（もやう）の汚れるのも氣にしないで犬の頭を撫でてやつた。ブラウは田原が家を出る時、貞子に跟（つ）いて三輪崎まで走つて行つたの俥の後に

きり、其後杳（よう）とも姿を見せなかつたのであつた。

「お前は彼の日から今まで何所（どこ）に居たんだ？　え？　ブララ！」

貞子は斯う言つて凝視（ぢつ）と其の頭を見詰めて居たが、「何所から帰つて来た？」と言ひ乍らハラ／＼と涙を零（こぼ）した。若し傍（そば）に人が居なかつたなら、「お前は屹度（きつと）主人の行衛と其の前後を見て来たに相違ない、サ、詳しく話して下さい」と言つてブララの首を抱いたに違ひない。

令紙二〇（新案登下山田製）

ガラス使用

躬（かがん）て一行は山の上に登つた。二坪ばかりの小い墓場には地震の為に惨死した庄平夫婦の墓石があつて、其の右手に小い穴が掘（ほ）られてあつた。人夫は環（たまき）の手から遺骨の箱を受取つて夫れを埋めた上に二尺ばかりの小い木（もく）標（へう）を建てた。

田宮清一之墓といふ文字を書いた木標が貞子の眼（め）の前に白く鮮明（きつぱり）と見えた時、去年の九月以来、疑問（もん）の裡（う）に過して来た田宮の死といふ事が、始（はじ）めて判（はん）然（ぜん）と意識された。

字数二〇（新案登録下山田製）

ガラス使用

「とう〳〵亡くなられたのだわ!」と祈って居った妹貞子はぐら〳〵と眼が舞（ま）ふやうに感じて、傍（そば）に立って居た従~~姉~~妹（いとこ）のお~~清~~絹（きぬ）の肩によろ〳〵と蹌踉（よろ）けかゝった。

貞子は初めてハッキリと夫に死訣（しにわか）れたと思ふと、甚の墓標の前に跪（ひざまづ）いて両手を合せて夫れを拝みたかった。しかし三尺ばかりも高い所に立って居た義兄（あに）の盛久（もりひさ）が「拝むのぢやないよ。」と言ったので、餘儀（よぎ）なく墓標を見詰（みつ）めて居ると、音無はピリポの持って居た赤い花環（はなわ）を貞

ガラス使用

子に渡して、「これを紐の墓標（ぼへう）にかけなさい。」と言った。

貞子は音無の言葉を聴いた時、救はれたやうな嬉しさを感じ乍ら、其の花環を掛ける為めに一歩（ひとあし）墓標に近づいた。貞子は生れて初めての言ひ知れない嬉しいとも悲しいとも判らない感情で其の花環を墓標へかけながら、「ヨあなたは亡くなったのですネ」と心の中で静かに言ひかけた。熱い／＼涙をポト／＼と土の上に落した。お絹（きぬ）はもう堪らなくなって、声を

ガラス使用

立て、泣出した。音無もハンケチを眼に押当て、俯（うつむ）向いて了（しま）つた。

　ザワ〳〵と薄（すゝき）の枯葉が動いたので、一同が吃驚（びつくり）して横手の方を見た時、二十前後の青年が、盛んに煙の立登る一束（ひとたば）の線香（せんかう）を手にして枯草の中から出て来た。

「誰だらう？」と思つて居ると、青年は其の墓標の前に線香の一束を供へて「先生！」と喉（のど）の裂（さ）けるやうな声で一口叫んだす、土へ食ひ張付くやうにして項垂（うなだ）れて居たが、

聴（やか）て起上ると同時に狂人のやうに草原を下の方へドン／＼と走つて行つた。一同の中に甚の青年を見知つた人は一人も居なかつた。

「さア、帰らう！」と言つたのは盛久であつた。一同は残刻惜しいと云ふよりも寧ろ物足りないと云ふ感じで、見返り／＼墓地を離れて山を降（お）りた。山の中ではブラらか頻りにワて／＼と啼（な）いてゐた。

二〇（[illegible]栄堂下山田製）

宿命（十一）

上京

三十五枚

通計一千九十四枚

[illegible]二〇（[illegible]下山田製）

ガラス使用

上京

音無が伊賀（いが）に見送られて三（さん）ノ宮（みや）驛（えき）から新橋行の汽車へ乗込んだのは午后の九時であつた。

「石塚（いしづかくん）君に會（あ）ひたかつたのだが、残念だつた。君から宜しく言つて下さい」

音無は窓から首を突出しながら言つた。

「あの聖書會社の社長は、なかなか太ッ腹（ふとぱら）だから大丈夫だよ。石塚君の事は僕が引受けて置くから、君は上京して太地家（たいちけ）の行衛（ゆくえ）を調

ガラス使用

で出して紙の結末をつけてやつて呉れ給へ。」

「何とかして調べて見よう。そして、君すぐ手紙を出すか或は帰途（かへり）に立寄つて更に詳しく話すか何れかにする。」

　言つて居る時、インバネスを着た三十五六歳の色の白い男が音無と伊賀との會話して居るのをチラと眺めながら列車の中へ入つて来た。

「出来たぞ！」と伊賀は小声で言つた。音無は「うん。」と點頭（うなづ）いたが、其の途端（とたん）に相圖の笛がピーイと鳴つて汽車は静かに動き出した。

ガラス使用

425

『左様なら！』と言ひ乍ら音無の手を確（しか）と握つた伊賀は、『音無君、短氣を起さないでネ』

『安心し給へ、海千（うみせん）山千（やません）の僕だから』

『左様なら』伊賀はぢつと汽車を、見送つて居たが、汽車が構内を出てしまつた頃、窓から首を引込めて、座席へ腰を卸しながら、最（さい）前（せん）の男を見ると男は一間ばかり向ふの方で頻りに某新聞を讀んで居た。音無は此の男が何所（どこ）まで行くのか、そして交替（かうたい）の時、どんな合圖（あいづ）をす

ガラス使用

るのか夫れを知り度いものだと思つた。

九時四十六分に汽車は大阪驛へ入つた。すると甚男はマダ汽車の動いて居る内に、窓の中から首を突出して、プラツトホームの方を見て居たが、汽車の停（とま）つた時、右の手にハンカチーフを提つて夫れを一寸差出した。すると乗客の群（むれ）から二三間離れて立つて居た洋服姿の男が同じく白のハンカチーフを一寸振つた。そしてインバネス甚男が汽車を出て洋服に小い手帳のやうなものを窃（えつ）と手渡したが、

半截二〇（新榮堂十山田製）

い洋服はキヨロ／＼と四圍（あたり）を見廻し乍らやつて来て音無の右隣りへ腰を掛けた。

「御苦労様ですネ」と音無は（が）笑ひ乍ら声をかけると、「いやア、どう不悪からず」と洋服、、は帽子に一寸右の手をかけて會釋（ゑしやく）した。京都驛でも大津驛でも同じ方法で交替（かうたい）したが、彦根へ着いた時、大津から来た和服の男は頻りに窓の外を眺めて居ても、一向（いつかう）交替らしい男が来なかつた。ブツ／＼と口の中で何だか呟いて居たが、汽車を出て窓の外で頻りん改札

二〇〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

口の方を眺めて居た。すると色の白い若い男が息（いき）せき駈けて来て、

「銃列車だって電話が掛ったもんだから、主任は居ず大魔誤（おおまご）つきサ。」言い乍ら長いマントの前を一寸開（あ）けて、金釦（きんぼたん）を見せてハヽヽと軽く笑った。

「馬鹿な、銃列車は此（こ）の驛へ停車しないぢやないか。」

「ねエ、主任は少しボンヤリだから。」

マントは急いで列車へ入って來て、音無の

令裁二〇（新栄堂下山田製）

ガラス使用

前に腰を掛けた。餘程周章（あわ）てゝ駈付けたと見え、頻りに額の汗を拭（ふ）いて居た。

汽車が十分ばかりも闇（やみ）を縫（ぬ）つて走つたと思ふ頃、音無はポケツトから名刺を出して夫れをマントの前に窃（えつ）と差出しながら、「どうも御苦労さまですな」と言つた。マントは周章てゝ鳥打帽を一寸脱（ぬ）ぐ真似（まね）をしながら「はあ、どうも……」と言ひながら其の名刺を受取つた。

「どうも御苦労さまですな」音無は同じ挨（あい）

ガラス使用

拶（さつ）を繰返した。

「いゝや、あなたこそ御迷惑でせうか、どうぞ悪からず……」

「掏摸（すり）の用心（ようじん）になつて安心ですよ。」

「併し御察し申します、御迷惑の点は……」

「夫れは寔の所嬉しいものぢやアありませんが、あなた方だつて愉快ぢやア無からうと思ひます。」

「實の所、私共は斯うして貴方（あなた）がたに近寄つては不可（いけな）いのです。あなた方（がた）の御自由を束縛して

はならないんですから」

「君は斯うして我々に蹤いて来るのか専門ですか」

「いいえ私は専門ぢやありません。だからヘマな事をやりましてネ、時々……」

「ヘマな事の、どんな事をなさいましたのです？」宏子

「二月程前でした、私は余りお気の毒だと思つて、同情し過ぎた結果、見失ひましてネ。月給西令の二十もフイにしましたよ」

中聯二〇（新東京下山田製）

「僕は逃げも隱れもしないから安心し給へ」

「有難う、先（ま）ア可愛がって下さい。罰俸（はつぽう）を食っぱ年末賞與が無く、お負（ま）けに昇級（しやうきふ）出來ないと來るのですから」

「どんな種類の人達に、さうやって蹤（つ）いて行くのですか。」

「さうですナ、純粋の發狂人、直奏狂（ぢきさうきやう）、顕（けん）官（くわん）に漫（みだ）りに面會を求める者、ロロ人、夫れから近頃は敬神狂（けいしんきやう）といふのが時々あります。こ

●二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

れは一番始末（しまつ）に統へない連中で、何かというと神國（しんこく）々々言つて途方（とはう）もない事を仕出（しで）かしますから、な……」

「では僕は何の系統に属するんだら……？、矢張（やつぱ）り敬神狂の方でせうか。」

二人は声を揃へて、ハヽヽと笑つた。

「失礼します、最（も）う直きですから」と言つてマントは昇降口（しやうかうぐち）の所へ出て行つた。

米原（まいばら）で入つて来た男は頭の少し禿げた四十頭で、長い旧式の羽織の紐を弄（い）りながら、

「あなたですか、どうした事です？」と笑

ガラス使用

云ふ言葉のひ、或は其男が知人ででもあるのかと思つて凝乎（ぢつ）と其の顔を見て居ると、

「お顔を見ると直ぐ跟（つ）いて行く必要があるか無いかが解（わか）りますよ。」と云つて煙草を吹かし初めた。

「顔で区別出来るのですか、其の人の思想が……」吾輩は笑ひながら問うた。

「さうですよ。跟（つ）いて行く必要があるお方なら、其方（そのかた）のお顔は大抵悲観（ひくわん）して居ます。貴方（あなた）のやうな円満な人相（にんさう）のお方は其様（えく）な必要があり

ガラス使用

ません。」

「では僕の思想も顔のやうに円満だと仰しやるんですネ。」

「然（さ）うです、私共は人相を観ると直ぐ其人のお心の底まで解（わか）ります。」

二人は種（いろ）んな話を三十分も続けたが、其うち吾輩は睡（ねむ）くなつて、窓へ頭を凭（もた）せたまゝうつ〱と眠つて了（しま）つた。

「名古屋々々々！」と呼ぶ声に眼を覚した時隣、もう其男は前の腰掛に居なかつた。夫

ガラス使用

れから豊橋、浜松、静岡、沼津の各驛で夫ら（それ）しい男が交替（かうたい）に入（はい）つて来たが、別に話しかけもしなかつた。

翌日午前十時十分に汽車は國府津驛（こうづえき）へ入つた。吾輩は窓から首を出して交替の男を見てみると、大島絣の羽織を着た丈（たけ）の高い顔の細長い男が入つて来て、

「貴方（あなた）が吾輩信次君ですか、打解（うちと）けて話しながら參りませう、私は名刺を差上げたいのですが、差上げる譯（わけ）は參りませんから、一

字數二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

す。御覧下さいませ』と云って細長い名刺を音無の眼（め）の前に差出して直ぐ夫れを引込めた。名刺には海崎種次郎（うみさきたねじらう）と書いて其の右に長々しい肩書があった。

二人は打解（うちと）けていろ〳〵話して居るうちに海崎（うみさき）は音無の顔を覗（のぞ）きながら、

『どうせ貴方（あなた）は私の近くにお宿（とま）りでせうから……』と意味ありげに言った。

『貴方（あなた）のお近くの？、貴方は何地（どちら）にお住いですか。』

字數二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

「俺は芝の今里町です、もう彼所（あすこ）に四年ばかり住つてゐます。」

「さうですか、俺は麹町（かうじまち）の方に行きます。」

「麹町へ？　あの太地（たいぢ）さんの所へお泊（とま）りぢやないんですか。」

音吉は不意打（ふいうち）に太地（たいぢ）といふ言葉を聞いたのでギクリ！とした。そして少し慄（ふる）へた聲で、

「太地の？　あの太地お常さんですか。」と問うた。

「婦夫小見よ、隠したつて駄目だと言はねば

中[illegible]二〇（[illegible]）

ガラス使用

かりに海崎（うみざき）は得意（とくい）らしく、「彼所（あすこ）へ行らつしやるんでせうね、あの猿町の大地さんへ。」と言つた時、音無は圖らずも大地の住居が知れたので、胸の動悸（どうき）を静めながら、出来るだけ沈着（おちつき）を見せながら問かけた。

「大地（だいぢ）さんは猿町のどの邊（へん）に居られますか。」

「四十八番地で、若栄（まつえい）女学校の裏手（うらて）です。」

「さうですか、大伴（おほとも）さんも彼（あれ）一緒に居られますか。」

「大伴時子さんですか、彼の方（かた）は ~~[illegible]~~

ガラス使用

お一人（ひとり）で臺所（だいどころ）の方に居られますす』

『別居して居るのですか、姉の時子さんは』

『……………』

『然（さ）うです、太地さんの所居は家庭教師と娘さんと三人暮しです。』

『堅爾君（けんじくん）は京都の方に居られるので・せうか。』

『堅爾君？、時子さんの夫（おっと）でせう？、』

『えエ、然（さ）うです。今何所（どこ）に居られます？、』

『姉の方は疾（と）ッくに亡（な）くなられましたよ。』

『えゝ？、あの大伴（おおとも）堅爾君が亡（な）くなられた？、』

「夫れは最（も）う半年も前の事です。あなたはマダ御存知無いのですか。」

「知りません、些（ちつ）とも知りません、夫れは驚いた、どんな病氣で亡くなられましたの。」

「どんな病氣って隨分（ずいぶん）悲惨（ひさん）でしたよ。」

「悲惨？ どうしたのですか。」

音無は根堀葉堀り（ねほりはほり）問うたが、海嵜（うみさき）は遂う（とうと）明瞭（はつきり）と言はなかつた。

二人は横濱驛で下車した。改札口を出た時

音無は海嵜を顧眄（ふりむ）きながら、

「君、僕はお願ひしたい事があるんだ。實はネ、君も豫（かね）て聞いて居られるでせうが、伯の、太地家が東京へ移轉する一原因になつた田原清一君の未亡人ネ、其の未亡人が今度何所かの神学校へ入学したいと云ふので、僕は實の所其の用件で上京したんだが、」

「はあ、然（さ）うか（です）、夫れは大變結構な事ぢや（でご）ないか（ございますえ）」

「所がだ、最初神戸の市の神学校へ入学す

二〇〇（神楽坂下山田製）

る手筈になつて居たのだが、僕が交渉中（かうしやうちゆう）に、
君達のやうな方（かた）が訪問したので、学校では急
に怖（おぢ）けづいて謝絶されて了（しま）つたのだ。だから
横濱へ行つても僕の交渉が濟むまで訪問しな
いやうに君から先方へ話して呉れる譯には行
かないでせうか」

「宜しい、宜しい、僕は程よく言つて置き
ます。其の学校つてのは何所（どこ）ですか」

「山手通りの二百九番です」

「では本牧行（ほんぼくゆき）へ乗つて行けば宜いのですか

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

ら甚所までお伴（とも）致しませう。」

二人は本牧行（ほんぼくゆき）の電車へ乗つたが、小いトンネルを通り抜けた所で下車して、坂路を左の方に登つた。阪の登り口に弐階建の小い家があつて、其の表看板（かんばん）に「秘密探偵社（ひみつたんていしや）」といふ四角な金文字の看板が懸つて居るのを見た時、音無は蝙蝠傘（かうもり）で一寸其の看板を指しながら海（うみ）峯崎（さき）の顔を見て冷（つめ）たく笑つた。海峯崎は頭を掻きながら、「~~違~~お違ひますよ、儂達は彼（あ）アしてお金を儲けるんぢやアありませんか……」

「失敬々々、僕はそんな意味で言ったのぢやありません。」

二人は張（はり）の無い声で笑った。軈（やが）て坂を登り詰めた右へ左へ曲りながら二百九番を訊ねあてた時、海嵜は、

「いやア失敬致します。又五六年でお目に懸りますから……」と云って門の所から引返した。

音無が玄関へ行ってベルを押すと、其所（そこ）へ出て来た女学生は、吃驚（びっくり）したやうに、

全紙二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

「先ア音無先生ぢやアありませんか」と云つてツカ〳〵と側近く進んで来た。

「木田華さんですか……さう〳〵貴女は此の学校に居らつしやるんですネ」

「すネエは驚くぢやアありませんか、私、もう此校に二年も居ますのよ」

「夫れは宜い、寔は不僕は独の兄の妻君を此校へ入学させて貰はうと思つて来たのですよ」

「兄弟の奥さんがね、越う……」と言つたが

思ひ出したやうに、「まア何卒（どうぞ）お上り下さいまし、今舎監の方をお呼び致しますから……」

音無は應接室に導かれた。木田（きた）~~輩~~は裏の方へトこ〳〵と廊下傳ひに走つて行つたが、軈て小柄な躰のまん円い四十恰好（かつかう）の女が入（はひ）つて來て、丁寧に挨拶をした。

音無は手短かに自子の累歷と希望とを陳べて校長への紹介を頼んだ。

舎監が出て行つて間もなく廊下に靴の音が聞えて、少し紅ら顔の胸の張つた金髪の婦人

~~四十~~三十五六とも見ゆる

（鈴木坂下山田製）

がドアを押して入って来た。

「先ア音無さんですか、山田に居らっしゃるミス・ライカから貴方（あなた）と田泉の奥さんとが此方（こちら）へ行くからって詳しい紹介状が来てゐます。」かも知れない

「然（さ）うですか、夫れはどうも……」

音無は感謝の念が心の底から湧上って来た。夫れは神戸の学校へ入学の手筈が喰違（くいちが）って當惑してゐる時、不圖ミス、ライカに出会（であ）って其の理由を話したのだが、其時ライカは横

隣に新しい学校があるという話をして呉れただけで、別に紹介状を書いてあげるとも何とも言はなかつたが、~~要らぬ早手~~甚様（えん）な親切（しんせつ）な先廻りをして呉れて~~れと頼まれた時~~あつたのかと思つた時、本當に嬉しかつた。

「何時（いつ）どちらへ？」とフラウアは蕩（とぼ）ろしやうな愛嬌（あいきやう）を顔に湛（たゝ）えながら言つた。

「十一時二十分の汽車で……」

「然（さ）うの？　田宮さんも御一緒に？」

「子供も二人ありますし、兎に角大学を許

可されるか何うか伺ひ致しました上で電報をお打つ心算（つもり）でございます。山

四・否（いい）エ、甚う御心配要（い）りません。ミス・ライカの御手紙で悉皆（すつかり）私、事情を知つてゐます。可哀相（かあいさう）不本意に、私共は甚様（えん）な境遇に居なさるお方を保護しませう。二人の子供さんは信者のお方が預つて下さいます。奥さんは寄宿舎へ入（はい）つて一生懸命に御勉強なさるが宜しいでせう。私、もうちやアんと心の中でお部屋（へや）まで用意してあります。山

音無は重荷（おもに）を卸したやうな吻（ほつ）と安堵（あんど）の思いをした。

「では入学を許可して戴けますか。」

「え、〳〵宜しいとも、お子さん達の事も私、何とか屹度（きつと）お世話致しますから。」

「どうも有難うございました。」

音無は心から嬉しさうに頭を下げた時、ドアをノックする者があつた。

「どなた？」とミス・フラワアは声をかけた。

中判二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

『木田（きだ）華です、お差支ありませんですか。』正

『木田~~華~~さん、どうぞお入（はい）りなさい。』正

ドアが開いて木田華はニコニコ笑ひながら入つて来た。

『木田~~華~~さん、音無さんはお國の方（かた）ネ。あなた田舎の奥さん御承知？』正

『ええ、能（よ）く存じてゐます。』正

『近い中に此（こ）校へ来ます、嬉しいでせう？』正

『いよいよ来られますか、本當に嬉しいですワ。』正

[illegible]二〇（神樂坂下山田製）

託して居る所へ小使が来て、怪訝（けげん）な顔付で音無を覗（のぞ）き込みますから、「此のお方が音無さんにお目に懸りたいと申して表にお待ちですが、此所（こゝ）へお通し申しませうか……」と言つた。音無は其の名刺を見た時、今までの安心も希望も何所（どこ）かへ飛（とび）散（ち）つて了（しま）つて、むら〱と腹立たしくなつた。

「いや、僕が出て行つてお目にかゝります……」

音無は校長と木田重とに挨拶をして、貞子が

二〇〇

954

上京したなら直ぐ同伴（どうはん）する事を約束して、二人の子供の事~~まで~~を呉々頼んで置いて玄関へ出た。ミス・フラワアも林田妻も其所まで送り出して来た。

『左様なら！』と挨拶（あいさつ）して~~[illegible]~~芝生の所まで来ると其所んは自~~転~~車を片手で押へながら、玄関の方を眺め~~かき~~つつ、音無の出て来るのを待構（まちかま）へて居る二十七八の洋服姿の色の浅黒い男が立つてゐた。

『あなたが音無さんですか。』

「然（さ）うです。何か御用事ですか」

「二十二日に鳥羽から汽車にお乗りなさいましたですか。」

「いいえ、僕は神戸から来たのです、そんな事を訊（き）いて何（ど）うするんですか？」

「田宮の未亡人（おくさま）は何といふお名前ですか。」

「貞子（ていこ）といふんです。」

「お年齢（とし）は？」

「そんな事は宜いぢやないか君、近々に学校へ入学したら直接（ぢか）に訊（き）けば判（わか）るぢやないか

二一〇（[illegible]山田製）

ガラス使用

、ママが入学もしない前（さき）から、然（さ）うはじくられちやア困るよ君、神戸でも甚の午で閑にしたんだから……』

『いや失礼しました、ではお出でになってから お伺ひ致しませう』

男は自転車を押して外へ出て行った。ミス・ララワーは心配らし最前から様子を見て居たく駈寄って来て、

『Detective（デテクチイヴ）？』と言った。

音無はyes（イエス）と言って宜いかno（ノー）と言って宜いか

一寸途迷（とまよ）つてゐた。

一行アキ

音無は帰り途（みち）に、攝津驛から貞子宛に、「ニウガクデキル三ニンツレテスグタテ」と電報を打つて置いて~~東京へ來た。~~プラットフオームへ行つて電車を待つてゐると、

「大層お早うございましたネ。」と言つて後から声を掛ける者があるので、吃驚（びつくり）して振返つて見ると其所（そこ）には海崎（うみさき）がニタ〳〵と笑いながら立つて居た。

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

458

短篇　十二

蔓回　枯忍

四十枚

通計一千百三十四枚

1134
66
48
1180
1148
124
28
120

アラキ

959

藤中

同情

音無は富士見町の淀野（よどの）の宅へ行つて玄関のべんを静かに押（お）して取次の出て来るのを待つてみると、障子（しやうじ）がサラリと開（あ）いたと思ふと、

「何呀（おや）！先ア（ま）音無（おとなし）さんぢやありませんか。」

と言つたのは派手（はで）な明（あか）るい縞柄のお召（めし）に、紫縮緬の羽織を着た夏子であつた。

「いやア、奥さま突然お伺ひ致しまして……

「何所かへお出かけぢやア有りませんか。」

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

「いいえ、今日は丁度約束の物を一つ書き上げたので、今までお客様と種（いろ）んなお話を致して居たのでございます。」と言って夏子は音無の顔を眺めながら、「今、留う（たし）も音無さんのお出でる噂だったら？」ッて、宅と話して居た所でございました。さ、何卒（どうぞ）お上り下さいまし。」

「どうして甚様（そん）な事を？、…………」

「そんな豫感（よかん）がありましたので……………」

夏子が~~莞爾~~（にっこり）嫣然笑って居る時、中廊下の所から

若々（わか）しい顔を出した淀野（よどの）は、

「ヤア、音無君。能くいらツしやいました。今も家内と君の事を言つて居た所だつた。さ、上り給へ」と言つたら、玄関へ出て来て

「君も偉（えら）くなつたもんだ、今朝（けさ）から三度もマダ着かないか、マダ見えないかツて天からお調べがあつたよ」

「あ、然（さ）うですか、読めました、読めました。今も其のお使ひに送られて此（こ）家まで来たのです」

ガラス使用

「御迷惑でせうね、随分……」

「いいえ、不案内の所へ行くには却つて便利です。」

言ひ乍ら音無は淀野に案内されて二階座敷へ上つて行つた。程なく夏子（なつこ）も入つて来て三人は卓子（テーブル）を囲んだが、淀野は悉皆（すつかり）心の戸を開いたといふやうな顔付で、

「何時に今度は何の御用で御上京なすつたのですか、牧師の會合でも……」

「いいえ、例の田原君の一家の事で……」

全數二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

「田舎さんは新嘉坡（シンカポール）で来畜ん、お氣の毒な事でしたネ、そして甚のお後（あと）を何（ど）うなさるのでございますか。」

夏子は同情深い眼で音無を見ながら訊ねた。

「今度、未亡人（おくさん）が傳道学校へ入学する事に決心なすつたので、甚の掛合に来たのです。」

「尼さんになるのですか。」と淀野（よどの）は少し驚いたやうに言つた。

「さうです、暫く浮世を逃れて專心宗教を研究して見たいと申すのです。」

今版二〇（神樂坂下山田製）

『どうして又た其様（そん）な事を思ひ立つたのでございますか。』

貞子は心配さうに問うた。淀野も『ネエ？』と言つて貞子に調子（ちようし）を合せた。

『田宮君の亡（な）くなつた後で、種々（いろ）なゴタゴタがあつて、貞子さんもつくづく故郷が嫌（いや）になられたのでせう。』

『御親類に東家（とうげ）さんといふやうな富豪があるぢやありませんか。』

『さうです。だから田宮君の残してあつた

ガラス使用

幾許（そくばく）の貯金を東家君（たうかくん）に供託（きやうたく）して、月々夫れで三人が食つて行かれるだけのものを利子として貰ふ事にしたのです。」

「さうでありますか、夫れなら先（ま）ア御結構でございますワネ。しかし学校は何年で御卒業でございますか。」

「三年です。そしたら獨立して所謂（いはゆる）バイヴルウーマンになるのです。」

「バイヴル・ウーマンつて、何（ど）れ程の俸給で傭（やと）はれるものでございますの？」

ガラス使用

「先ア（ま）精々十二三円ですネ。」

「唯ッた夫れッぱかり？、本當ですか。」

夏子は驚いたやうに眼を円くした。

「然（さ）うですよ、日本の牧師給が平均二十四五円ですからネ。今から七年前に海老名弾正君が本郷教会で四十円、植村正久君が番町教会で唯（た）ッた二十五円だつたのですからネ。」

「牧師つて甚様（えんな）に薄給なものですか。」と流野は呆れたやうに傍（そば）から容喙（くちだし）をした。

「然（さ）うですよ、僕なんかも、一ケ月に四時

学校だとか祈禱会だとか云つて平均二十回の集會をするが、俸給二十五円だ。しかし一回の集會に對して一円廿五銭の謝儀を呈すると云ふ事は本當に感謝すべき事ですよ。先（ま）ア考へても御覧、一体（いつたい）日本の習慣といふものは、賽銭（さいせん）一文を神佛の前に投げて天下泰平五穀成就家内安全を祈つたのですもの。』

『兎に角夫れではお氣の毒ですネ。』と良子は少し頭を傾（かし）げて何だか考へ込むやうな風をした。

ガラス使用

「音無君、久し振だから何所（どっ）かへ行って一緒に御飯でも食べて来よう。そして此家（こゝ）へ宿り給へ。」

従野が斯う言って呉れた時音無は本當（心から）嬉しかった。さうな顔をして、

「有難う、しかしエスピヨンが来ますよ。」

「大丈夫、甚（そく）様な事ん對しては僕等夫婦は何とも思って居やしない。」

「有難う、では四五日御厄介になります。」

音無は初めて寛（くつろ）りだやうに椅子に凭（もた）れかゝ、

別

ガラス使用

4969

つて壁の油絵を眺め廻した。

二行アキ

翌朝音無はミス、フラワアから一通の手紙を受取つた。夫れは是非面會したい事が出来たから直ぐ来て呉れとの意味であつた。で、朝御飯（あさごはん）を濟（すま）すと直ぐ横濱へ出かけて行つた。貞子の大学を俄かに許さないと云ふのでは無からうか、或は子供を預る人が出来たから其人に會へと云ふのでは無からうか、など、車中で種々（いろいろ）な事を想像（さうざう）しながら~~横濱~~偕道女学校へ行

つて見ると、ミス・フラワアは少し當惑（たうわく）した
やうな顔付で音無を迎へて、
「音無さん、私、田原さんネ、是非御世話
したいのですよ。しかし子供さんを預る家（うち）が
見付からないので困ります。どうしませうか
ネ。」と言つた。
「寄宿舎へ一緒（いつしよ）に入れて下すつたら如何で
せう？、」
「夫れがネ、お一人が坊ちやんでせう。私
の學校では男のお子は決して預らない事に決（き）

ガラス使用

めてゐます、今までも能く十一二になる男の子を伴れて寄留したいつて申込がありまし~~す~~たが、私夫れを御断（おことは）りしてゐます。」

「今では舎監の方の自宅（じたく）へお預り願へませんでせうか。」

「私、最初から其の心算（つもり）でした。けれども夫れが……………」

音無には大體（だいたい）の様子が解（わか）つた。昨日の男が舎監の所へ種（いろ）んな事を訊（き）きに行つたので俄かに恐氣（おぢけ）づいたのだと想像された。で、夫れか

字數二〇〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

別

ら一時間ばかり種々（いろいろ）と相談したが、結局音無の思ふ通りにならなかつた。

「ネ、音無さん。私、本當に田泉さんを入學させて上げたいのです。お子供さんの事を、何とかお考へ下さいまして、田泉さんを學校へお入れ下さい、私、十分（じゆうぶん）お世話致しますから、」と言つた。

「フラリアは愛嬌ある眼で音無の顏を凝視（ぢつ）と見詰めながら「ねエ、お國にはいろいろの法律がありますから……私は小鳥のやうに自由

ガラス使用

ですか……」

　音無は黙つて考へて居たが、偶（ふ）と昨日出会つた木田（きだ）の事を想ひ出して、

「今日は土曜で学校もお休みのやうですから、私、木田さんと御相談致します」と言つた。

「夫れは宜しいです、此所（こゝ）へ木田さんを呼びませう。」

「いいえ、私はこれから友人の佐藤君を訪問したいので、木田さんに御案内して戴きま

1874

二行アキ

す。」

「然さう？　では木田さんにも其の子供さんを出入りする家を考へて書くやうに言つて下さい。」

「ええ、無論相談して見ませう。」

音無は校長と握手して訣れた。

「木田さん、矢張り母子（おやこ）別々（べつべつ）に暮すつて事は善く無いネ。」

音無は~~井伊掃部の銅像~~公園のベンチに腰を

掛け乍ら言つた。

「駄目ですよ先生、そんな事が出来るものですか。本當に心からお世話して上げたいと言つて他の哲子（てつこ）さんや太（じゃう）吉郎（きち）さんをお預りした時だ（人があると）（でも）、長い年月の間には（純粋（きつと）な）紛擾が起（る）りま（に決）（ま）すで（てねますワ）せう。夫れに隠つて（た）預つて下さいつて頼んで夫れが旨（うま）く行くものですか。」

「ねエ、僕も然（さ）う思ふ。何（ど）うしようか知ら、もう電報を打つたのだから、家を畳んで出五日中には新宅を出立するだらうし、」と言つ

ガラス使用

て今更見合せよと言ってやる譯には行かず……」

『先生、巴子の奧さんは、どうして俄かにお子さんをか、抱えて傳道学校なんかへお入りなさらうと決心なすったのです？」

『夫れにはいろいろ抱と込入った事情があるんだよ、なんにもたく單に亭主に死なれたからとばかり云ふのぢや無いんだ。」

『ねエ、さ然うでせう。何か深あアく感じなすった事があるに違ひありませんワネ。どんな事ですの、先生は御存知でせう。」

ガラス使用

「知つてる、と云へば知つて居るんだが――人生てものは随分可笑しなもんだ。」

「どんな動機で新宮を引拂いなさるやうになつたの？」

木田は音無の側へ摺寄（すりよ）るやうにして腰を掛けた。

「人間てものは大きな敵よりも案外小い敵に負けるもんだね、僕は近頃つくづく其様（えん）な事を考へてる。」

「大きな敵小い敵つて、何（ど）んな事？」

ガラス使用

「貞子さんの事で考へて見ても然（さ）うだ。田辺君がフイと家を出て了（しま）つたのは去年の六月だつた。夫りやア一家の大黒柱に行衛不明になられたんだから貞子さんの悲しみってものは喩（たと）へやうの無い程でしたらう。けれども貞子さんはじッと持堪（もちこた）へたのです。健気（けなげ）な程確乎（しっかり）した覚悟で居られました。夫れから九月の中頃に田辺君が亡くなられたといふ電報を新嘉坡（シンガポール）から受取つた時も、マダ貞子さんは覚悟の臍（ほぞ）を固めて、どうしたつて自分は二人の子

此所（ここ）に踏止つて

（神楽坂下山田製）

ガラス使用

つれがのやうに、~~蜂は~~周章（あわ）て、右に左に動きありくのであつた。

「先（ま）ア美しい！」と呟きながら、眼を近づけたのは全身が金茶色で、翅が白と薄茶の斑（まだら）文のある一分ばかりの可愛いゆい虫であつた。蛛の割合（わりあひ）に足が長い、三分もあらうかと思はれる長い六本の足を伸（のば）したり縮（ちゞ）めたりしながら軽快（けいくわい）に歩（ある）き廻るさまは、絵（ゑ）で見た女優（ぢよいう）カルヹがカルメンに扮して、悪人ホセに薔薇（ばら）の花を投げた時のやうな態度（たいど）だと思つた。

ガラス使用

すると池には翡翠（ひすゐ）の衣を着た稍大きい三分ばかりの虫が来て、金茶色を軽蔑（けいべつ）したやうにノソ〳〵と歩き廻つ~~な~~てゐると、何所（どこ）からとなく白絹を纏（まと）うた少女のやうな足の長い華奢（きやしや）な小い〳〵細長いのが二つ連立つて来て、頗る軽快に跳（は）ね廻つた。

「何といふダンスだらう？」と呟きながら凝然（ぢつ）と見詰めてゐると、俄かにパタパタ〳〵と大きな響き＝比較的＝がしたと思ふと、濃茶色（こちやいろ）の一寸ばかりの虫が飛んで来て、

半紙二〇（神楽坂下山田製）

笠の上を縦横に這廻つたので、今までの小虫共は散り〳〵ばら〳〵に何所（どつ）かへ逃げて了（しま）つたが、長い二寸程の觸角（しよつかく）を有（も）つた哲学者は、縁（ふち）の方へ一二分躙（にじ）つただけで矢張り天下の形（けい）勢（せい）を眺めてゐた。吾輩は其の大きな羽のある虫を右の指で一寸（ちよつと）摘（つま）んで見たが、夫れは子供の時鯇魚（あめのうを）を釣る序に能く捕（と）つた川蜉蝣（かはげろう）といふ子虫であつた。

螻蛄

暫くして又た此別の虫が十も二十も三十も飛んで來てランプの笠一面に歩き廻つてゐ

⑳二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

た。パサ／＼パサ／＼と微（かす）かな音を立てる者、パチ／＼！パチ／＼！と小さい響（ひゞき）を立てるもの、音無の眼の前は微かに面白い眩（めまぐ）るしい舞踏場（ぶたうぢやう）となつてゐた。

音無は夢中（むちゆう）になつて甚の一つ／＼の舞（まひ）を~~前~~観、踊（をど）りと眺めてゐたが、此の~~魚~~舞踏場の片隅（かたすみ）の方に、憐れな一つの屍體（しれい）を發見した。夫れは灰色の舞衣（まひごろも）を着た小い虫であつたが、長さ四分もあらうと思ふ長い二本の足と二分足らずの短い四本の足と、三分ばかりの觸角を前の

別 6 4

ガラス使用

市に投げ出したまゝ、ぺつたりと横になつて死んでゐるのであつた。吾輩には此の小い虫が、何時（いつ）此所（ここ）に來て、~~佛蛙~~（そして）何（ど）んな事件の為めに死んだのかと云ふ事を知らなかつた。しかし（どうして）其所（そこ）には確かに一つの屍體（したい）があつた。吾輩は其の虫の屍體を見詰めて居るうちに何だか知らないが、悲しいやうな、恐ろしいやうな氣持に襲（おそ）はれたので、周章（あわ）てゝ、ぷツと洋燈（ランプ）を吹消して、蚊帳（かや）の中に藻（も）ぐり込んだ。蚊帳は釣手（つりて）の切れたまゝであつたが、其

ガラス使用

儘んして置いた。

一行アキ

音無は翌朝眼を覚して顔に捲（ま）きつく蚊帳（かや）を撥（は）ね除（の）けて見ると、明（あ）け放（ぱな）した儘にしてあつた窓の外にはカン／＼と日光が照（て）り栄（は）えて、竹の葉が涼しさうに風に嬲（なぶ）られて居た。

「何時（なんじ）だらう？」と言ひ乍ら机の側まで趨（はし）り寄つて時計を見ると、最う九時前であつた。

「九時！　夫れは汽船の出る時間だ！」

音無は両腕を拱（こまぬ）いて窓の外を眺めた。山を

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

隔てた一里半向ふの滝で汽笛がボウーツと鳴るやうに思はれた。須英子（すゑこ）とナオミが人目を忍ぶやうにして汽船に乗込む様（さま）が眼底（がんてい）に泛（うか）んで来た。明瞭（はつきり）と

両（りやう）の頬（ほ）が冷（つめ）たく感じれたので、はツと気付いて、周章（あわ）てゝ涙を拭（ぬぐ）つた吾輩は両の手を机の縁（ふち）に突張（つツぱ）つて膝（ひざ）を（畳に）突きたら、偶（ふ）とランプの笠を見ると、昨宵（ゆふべ）の大舞蹈（踏）場（ぶたうぢやう）には何十と無く小い尻（しりなね）が撓はつてゐた。滑稽な身振をした神主（かんぬし）も、金茶色のカルメンも翡翠（ひすゐ）の美人も、華奢（きやしや）

なダ2サアも、髯（ひげ）の長い哲学者も、皆（みん）な死んで居た。殊に（ことに）悲惨（みじめ）なのは外（そと）へ滲（し）み出た石油に浸（ひた）つて、油壷（あぶらつぼ）の外で酷（むご）たらしい死様（しにざま）をしてゐた何十の虫であつた。

「何故（なぜ）死んだのだらう？、此の虫は？、」

音無は大きな謎（なぞ）にぶつかつたやうな氣持で凝然（ぢつ）と澤山な虫の屍體（したい）を見詰めて居たが、

「さうだ、俺等は光りを慕（した）つて死んだのだ！光を見て死んだのだ！」

半紙二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別
6

斯（か）う叫んで机の上を力任（ちからまか）せに敲いた。

お音無は狂人（きちがひ）のやうに

[illegible]二〇（[illegible]）

別
6
4

供を肩て上げて立派にして見よう。世間が何と言はうが誰と云はうが、飽まで新堀の町で踏張つて戰つて見ようといふやうな勝氣が有り過ぎ程ありました。

此の一月の二十四日に田平君の葬式をした後（あと）で、あの船町の家を引拂つて、東京のピリポさんの有つてゐる中ノ町の宅へ引越したのですが、ピリポさんの兄さんのエノクさんも色々（いろいろ）と骨を折る、環（たまき）さんも同情して何くれと

盡して居たが土岐（どき）の、何樣（ほんさま）あなたも知つての

半紙二〇（神楽坂下山田製）

9810

通り俳の一旋は頗る自我の強い人達（ばかり）ですから、直子さんも餘程苦しかつたでせう。全く我々には想像も出来ないやうな突然な事件が三日にあげず突發して、夫れが爲めん直子さんは毎月何度泣かされたか知れない。しかし直子さんは甚（てん）様な休々のゴテ〳〵や角突合（つのつきあひ）は、ウこと歯を喰ひしばつて我慢して居たが、一つどうしても堪（こら）へ切れない事件が起つたのです。止

「堪（こら）へ切れない事件の、どんな事？、止

「夫れが僕の所謂何でも無い事件なんです。何でも（たしか）此の七月頃でした。僕は久し振りで貞子さんの家をお尋ねして玄関から案内を乞ふと、貞子さんは真紅な顔をして、黙って折出て来た了右の手を振るのです。僕は何か大事件でも起ったのだと思って直ぐ引返したのですが、矢張り氣懸りですから夕方又た伺って見ると、貞子さんは何時に無くゲッソリ悄氣込んで居るのです。何うなすったのですかッて尋ねても何とも言ひませんでした。理由

ガラス使用

別

は申されませんでしたが、何となく其後貞子さんは滅入（めい）つて行くのでした。僕~~▲~~も何（ど）うかして其の原因を知りたいと思つて氣をつけて居たのですが、二月程以前に斯（こ）んな事があつたのです。

音無はオヴアアコートの襟を一寸直したら木田の顔を横目に見た。

「どんな事が？」木田は貞子の身の上に振懸る大事件を豫想（よさう）しながら訊（き）いた。

「夫れが又た何でも無い事なんだ。僕は二

月程以前に東京（たうげくん）君と二人で高生村へ旅行して彼所（あすこ）の串本（くしもと）屋へ泊つたのです。」

「串本屋、あゝ、私、知つてますワ。」

「あすこの妻（かみ）さんと東京（たうげくん）君との會話を僕は傍（えば）で黙つて聞いて居れたのですが、あの妻（かみ）さんはなか〳〵確手者（しつかりもの）ですネ。」

「えエ、偉（えら）い妻さんですワ。何でも旦那さんに死訣（しにわか）れなすつたんでせう？」

「さうだつて、夏の熱い日に鰹魚（かつを）を釣りん行つたきり、帰つて来ないんださうな。屍骸（しがい）

（神楽坂下山田製）

ガラス使用

もう上（あが）らなければ舟も見えないんだってネ。」

「然（さ）うの？ そんな悲惨があったのですか。」

「処が、あの嬶（かみ）さんの言ふ事が面白い。」既（も）う去ぬから十三年にもなるんぢやが、どうしたって亭主（ていしゆ）が死（な）くなったとは思はれん、海へ落込んだのなら海の底で無事に生きて居るやうに思ふ。誰かゞお前の亭主は此の下に居ると教へて呉れる人があったら、私（わし）は今でも甚許から美海の中へ跳（と）び込んで見る。」って斯う言ふんです。つまり死んだと思はれないのか、あの

別

ガラス使用

妻（かみ）さんの生命（いのち）なのだネ。」

「~~つまり~~（では）亡（な）くなられた主人は妻（かみ）さんの心の中に明瞭（はっきり）生きてらつしやるんですネ。」

「先（ま）ア然（さ）うなんでせう。」妻（かみ）さんと東京君（たうげくん）とは十二時頃まで種（いろ）んな話をして居たが、翌朝~~私~~僕達は森浦まで引返して来て、彼所（あすこ）で巡航船を待つ間に東京君（たうげ）は海の景色を二枚写生（しやせい）しました。漸（やつ）と十二時頃に巡航船が着いたので、僕等は五六人の旅客と一緒に夫れへ乗込むと、運転手が出て来て、僕達に次の船まで待つ